

「あの……一寸お取次ぎを……」

「ほ、ほ取次には及ばないよ、約束の時間だからね」

「何したんだい」

とお濱の後姿を見て額に縋帯をした抱車夫の音藏が聲を掛けた、彼は中庭の掃除を済ませて今此玄關の後の廊下を通りかゝつたのである、音藏の居る所からは客の姿は見えぬ。

「イエ今あの……此お方が」

「オッお客様か」

客來と聞いて音藏は急いで彼方へ行きかける、お濱は呼止めた。

「あの旦那様に遇ひたいつて仰有つて……」

「旦那は珍らしくお歸邸になつてるぢやア無わか、早くお取次をしねいな、何を躊躇してるのだよ……」

「……あの取次は要らないと仰有つて」

「何、取次が要らねい……何誰様だい」

と音藏は一寸覗くと、モウ其處に立つ眩ゆい影、目をクシャ／＼させて。

「へい入つしやいました」

「ほ、ほ種んな人が出るお邸ね、妾急ぐのだから早く案内をして下さいな」

「何誰様で」

「今女中に云つたではないかね、妾佐藤男爵家の者だよ」

「エ、佐藤男爵の……」

音藏は低う曲めた半身を起して、凝と客の顔を見る、目鼻立から音聲まで、佐藤男爵に酷似の美人である。

「佐藤男爵家の何誰だい」

音藏の様子は急に變つた、詞も疎略に、叱り飛ばす様な太い聲、客の美しい顔は見る／＼赤くなつた。

「お前さんは何者です、何といふ無禮をするのです」

「名も云はねい取次も待たねいで突然他人の邸宅へ上り込むお前さんの方が無禮だッ」と後から袖を引くお濱に構はず。

「此お邸は待合や料理屋たア違ふせ、黙々で奥へは一足も踏込む事は出来ねい……佐藤と聞いて

ちやア猶更だツ

「オヤ訝しな事をお云ひだね、佐藤と聞いては……佐藤男爵だよ」

「判つてらア、お前さんア男爵が知らねいが當方ア肝癪だい、佐藤男爵に俺らア憎くつて堪らねいのだ……男爵が来る様になつてからな、このお邸は眞闇だ……可愛想に奥様や坊……エ、お前さんの知つた事ちやア無いヤ」

聲曇らせて罵つた。

「妾は佐藤男爵の妹喜代子といふ者だよ失禮をして後で悔まないが可しい」

「名乗られて驚く様なのちやア無いや、モウ度胸を定めた奉公人よ、奉公仕舞の玄關番だ、俺の癪に障る奴ア取次がねいからサツサと歸つた」

龍も躍りさうな腕を捲る、喜代子は流石に怯ちて後へ退る、踏段へドツカと音藏は大胡坐をかいた。

(四五)

別れやうと情ない詞を残して出た夫の後を心細く留守する味氣なさと、榊先生を招んで呉れと父に縫つて厳しく叱られ、モウ懐かしい師の君と相遇う事の絶望なのに心を腐らせた薫が食も進まず快々として居るを見る悲哀と、板挟みの煩悶を身置いて暗い坑の底に生きながら葬られた愁思で暮す綾子は、今朝珍らしく夫の歸邸に、病む人の如く寢れた姿をつとめて装して出迎へた、廣之は「まだ居るか」と云つた様に、瞥りと妻を見た儘ツイと居間に入つた限り調物があるから誰も来る事はならぬと人を寄せつけぬ、上野の夜の遭難も音藏の話で、怪我のないのは知つたが其後の様子も判らず、我身の上薫の事問ひたい聞きたい種々はピツシヤリ閉められた襖一重の無情に隔てられて、夫の心は千里万里の遠い彼方に。泣くに涙も涸れた綾子は、頭が痛いといつて寝轉ぶ薫の枕元に茫然と坐つて居ると、玄關に風變りの婦人客があつて、佐藤男爵の妹喜代子と名乗るのを音藏が拒んで通さぬとお濱の注進である、急いで表へ出ると、音藏はモウ自棄氣味の荒い詞で客を罵る最中であつた。

「これッ音藏、お前はお客様に對して何といふ御無禮を……お退きなさい」
と鋭く叱つたが、自分ら母子思ひの音藏が日頃憎む佐藤男爵家の人と知つて嬉しい心に反抗うのだとは早くも知つた、目で其意を告げ知らせ、彼方へ行けと云つても音藏は容易に肯入れぬ。

「可いねい々々々々、奥様、佐藤と聞いちやア油断が出来ませんや、何を誑かしに來た雌狐だか、これで旦那を失敗れア俺はモウ覺悟の上でございます」

「お退きといふに」

と強いて音藏を彼方に追遣つて綾子は鄭寧に叩頭をする。

「佐藤様からお越しでございますか、まことにお詫の申上げ様もございません少し逆上させて居る者でございますから飛んだ失禮を」

「あ、狂人ですかは、左様でせうねえイエそんなら謝罪をなさるには及びません」

「さ萬望此方へ」

と應接へ導いて改めて挨拶をする。

「妾、廣之の家内でございます、始めまして……」

綾子が優かに述べる詞を聞きも畢らず。

「おや御家内？あの大野様は御獨身でせう」

「……………」

「御夫人がお有りなさる様には聞きませんでしたかねわ」

綾子は此驚くべき無作法な問ひに何とも答へる詞を知らなかつた、喜代子は勝誇つた顔に華やかな笑みを湛えて。

「御主人に早くお目にかゝりたいのですが」

「ハイ……只今」

とそれを機會に綾子は次室へ出ると、云ほう様ない侮辱に總身にタラ〜と冷たい汗が流れ、顔は燃へる様に熱して、身を支る力もない、お濱を夫の所へ遣つて自分は居間に入るとバツタリと倒れた。

廣之は餘念もなく机に對つて何か大部の書類を廣げ調べ物に耽つて居る。

「あの佐藤様」のとお濱の聲を皆まで聞かず。

「ウム待つて居たのだ、鄭寧に此室へ御案内せい」

お濱は怪訝な顔して喜代子を導いた。

『やあ来ましたね、待つて居ました、サ、此席へ』

『大野さん、當家は可けないわね狂人の玄關番なぞ置いてと馴々しく間近に坐つた。』

『狂人？、とは』

『妾先刻から玄關で散々侮辱されたわ』

喜代子の廣之に對する態度は色賣る女の情郎に昵れる親睦である、人を魅するやうな眼を爽やかな辯で、玄關であつた次第を話す、廣之は深く頷いて。

『それは實に不都合でした、イヤ貴嬢に謝罪の方法を立てませう、爾しなくても今に皆追拂ふ代物ですが』

喜代子は膝を進ませると、美しい眉を一寸寄せて低い聲。

『夫人もまだ居らつしやるわね』

『彼女ですか、度胸を定めて動かん積でせう、ナニ今に居なくなるです、あんな連中に粘着れてると俺の周圍の空氣は何時までも古色蒼然ですはッは、』

(四六)

綾子に忠告を試みたいと云つた喜代子の詞を廣之は打消す様に首を振つた。

『いやそれは駄目ですよ、貴嬢の才媛を以てしてもそれは可ん』

『ほ、ほ何故ですの、妾さう云はれると反抗したいわ、妾あの夫人に負けると思つて？』

『負けるぢやないです、到底度し難い、所謂頑冥不靈ですから、俺は貴嬢をそんな事に勞したくない、彼女は既に夫の愛に離れた女だから、如彼して抛つて措いたら自然に淘汰されるです、終局がつくですよ、俺は自分の事業を妨害しない爲に急激な處置を執らなかつたわけです、それよりは子供の問題ですがね、貴嬢の仰有つた女教師は何うでせう、早く来て貰ふといふ譯には』

『大野さん、妾今日其女教師連れて来てよ』

『眞實だわねえ、何といふ考へだか解らないわ、相互の不利益だのにね、女性同士で妾忠告が試みたいわ』

喜代子は笑顔を傾け、凝と見る。

「今？、左様ですか、連れて来て頂いたのですか、それは有難う、子供さへ托して置けば俺は思ふ存分の活動が出来、且つそれが爲に此不快な家庭に解決がつく事になるのです、お話しした如く俺は巽伯に随いて山口の方へ旅行の日取が近づいてるので、それ迄には子供の始末だけは爲て置んと困る、老人は不在勝ですからな」

「妾貴方の御事情と可憐な薫さんに同情して妾の精力を盡してお力になりたいと思ふのですわ、兄もさう申して居るのです、大野さんの新生活に對して自分は外の事業に御加勢をするからお前は家庭的に御援助を申したら可からうつて、妾達兄妹で勝手に極めて居るのですよ、ほ、ほ貴方反つて有難迷惑ぢやなくつて？」

意味ある瞳は詞の外の情意を傳へる。

「は、迷惑かも知れませんが……」

「あら、ぢや折角連れて来た教師も還しませうね」
態と優しく睨んで。

「その代り同情の態度を變へて妾御夫人側になつて以前の平和に回復する様に仲裁の勞を執り

ませうね」

「フ、フ、モウ澤山ですよ」

「だつて迷惑つてな事を仰有るわ、人が一生懸命の同情に對して」と怨する如く俯向いた。

「はッは、嘘ですよ喜代子さん、俺は貴嬢方御兄妹へ復活の感謝を捧げて居るのです」

「眞實？、妾正直だから……だつて貴方辯舌が甘いもの、議會三絶つていふ御雄辯だもの、妾貴方の演説筆記を悉皆保存して、よ」

「貴嬢に読れると知つたらモウ少し巧妙に喋るのだつたはッは、」

「モウ之からは筆記でなくつて直接に聞かせて頂くわ……それから……ほ、ほ妾種んな理想を有つて獨りで楽しんで居るんだもの、可愛想ね」

「イヤ貴嬢も信明君を兄様に有つ方ぢや交際がお上手だから俺なぞはウツカリすると飛んだ失策を……」

「大野さんッ」

と喜代子は急に眞面目な態度になつて、美しい皆に微かな險を見せ、白い齒をチラリ堅く唇を

咬んで廣之の顔を眺める。

「貴方、まだ妾の眞情を了解なさらないの、この眞情を受けて下さることが出来ないの……妾

こんな……」

次第に語尾は消れたが聽て判然と。

「大野さん、あの連れて来た家庭教師を御紹介いたしませうね」

「は、遇ひませう、應接室ですか、スグ此室へ呼ばせませう」

と廣之は柱の電鈴を押さうとする、喜代子はそれを遮つて。

「あの一寸お待ちなさいよ……妾その前に貴方に伺つて置きたいとがあるわ、大野さん、貴方家庭教師は何な理想を有つて被在るの」

「從來のに懲りたですから、古い偏狭な思想を吹込まれて時勢に適合しない人間を作られても致方が無い、融通の利く人間にさへして貰へば可ですよ、貴方の鑑定に叶つた教師なら俺は安んじてお任せする、殊に女性の方は好都合だ、教育以外にも一切引受けて世話して欲しいと思ふ位です、それでないと俺の自由は依然制限されるですからね」

「人物に依つたら家事一切を委任しても可いと仰有るのね」

「然ですよ、俺は御承知でせうが一舉に或實力を獲やうと計畫して居る、その爲には何な犠牲を拂つても構はん覺悟です、況や家事の繁累に束縛されるやうな事は……萬一貴嬢の御盡力で其女教師が當分妻のない俺の家庭を引受けて呉れるといふ様な事になれば實に俺の幸福です」

「ちや人物の鑑定も其權限も妾に任して下さるわねえ」

「無論です、兎も角其女教師に遇ひませうか」

「はあ遇はせませよほ、ほ、ほ、」

「何うしたのです」

「ほ、ほ、ほ、大野さん貴方其女教師能く知つてらつしやるのよ」

「俺が知つてる？、俺の面識のある女ですか、はてな……」

「ほ、ほ、ほ、解らないの？」

「有りません、そんな女性に俺の知つた人は無い」

「有るわ、有るわ、ツイ近頃の御交際だけれど……モウ何方も能く解した仲だわほ、ほ、ほ、」
まだ解らねば之を讀めよと意中を通はす眼は輝き、喜代子は進む膝に縋る、袴を捌いて乗出す

謎語の様な詞に迷ふて廣之は妙な顔をする。

『大野さん、此袴穿いた女教師貴方御存じの仲ちやなくつて？』

(四七)

中玻璃の障子を透して明るい春の光が座敷一ぱいに流れて居る、紫木蓮を空に、地は笑靨花の真白に彩られた前栽は、飛石も燈籠も物みな陽炎となつて消えさうな長閑さ、何處で駒鳥が啼く。

此袴穿いた女教師をと自分を指して云つた喜代子の面は日に輝く花の様な、誇りに満ちた笑みを含んで、廣之がイカニ驚嘆の聲を發するかを待ち構へて居る、兄信明の詞に動かされた喜代子は今は廣之を獲やうとする手段に向つて傍目を振りぬのである、異伯が廣之の味方した功勞に答へやうとする或巨きな報酬？、それは廣之をして一躍して偉大なる富の勢力家たらしむる機會を與ふるので、其事情を兄から聞いた喜代子は廣之といふ男と併せて萬人理想の黄金の權威を掌握したい功名心は沸々と胸に涌いた、京都に嫁入したのも『伯爵』といふ夫と結婚したのであ

つた、夫が夫ではなく夫の家の肩書が夫であつた、で夫が負債の爲に華族の禮遇を停止された時に喜代子の戀は早くも破れたのである、何の未練も躊躇もなく病める夫を捨て家に逃げ歸つたのは彼の爲には當然の所置で、それを歡迎して怪しまぬ兄信明と共に其血を分けた如くその理想を一つにして各信するところに向つて一直線に進まんとするのであつた。廣之は始めて喜代子の袴に氣附いたのである。

『貴嬢か？』

『はあ妾今日から大野家の家庭教師よ、ほ、此教師ちやお氣に召さなくつて？』

『……戯談でせう』

『ほ、ほまだ彼な事を、戯談にこんな風をして伺はれるものですかよ』

と我と變つた服装を眺めて愁然と俯向いた。

『妾ね、お話に聞いた薫さんの事が情を動かして詮術が無いのよ、それに貴方の今の御境遇ね折角新生涯に入らうと爲さるのに夫人が同情されない爲に何の慰藉もない冷たい御家庭……と聞いて妾黙つて見て居る事が出来ないのですわ、これ妾の性分ね、で兄と相談して參つたのです、大野さん、妾この袴非常な決心をして穿いて伺つたのよ』

半巾を取出して密と目を拭く。

「妾自ら信じてよ、人物の鑑定も仕事の権限も任された妾自身を貴方に薦めま
す、大野さん、萬望妾さんの教師に雇つて下さい、可憐な薫さんを救はせて下さい」

喜代子は切ない同情の眞實を知れよとばかり顔を覆ふて微かに泣くのであつた。

「これは何も……これは實に驚いた、貴嬢の御精神にはこの大野廣之全く感服した、男爵家の
令嬢が自ら進んで家庭教師に？……貴嬢はそれ程までに俺を思つて下さるか、喜代子さん、

俺は改めて貴嬢に感謝をする」
廣之は衝と手を伸す、喜代子は一寸後を見て。

「妾の希望を容れて下さるの、屹度ね……妾嬉しいわ」
と顔はまだ背けた儘、手に探る手を確かと握る、軒から纏れて落ちた雀の影が障子にサツと一
文字。

喜代子は紅くした顔を俯向けて居る、廣之は身を退ひて。
「貴嬢が假令暫時でも子供を保護して下さいれば妾は實に百人力の味方です、今といつて今この
厭な家庭の問題を解決する事が出来るのですからな」

「妾に任せて下さるの」

「願つても左様爲たいです、併し貴嬢のお身分や事情が……」

「ほ、ほ妾當邸の家庭教師佐藤喜代子よ華族だの男爵だのつて肩書は持つて來ないわ」

喜代子は自分の引受けた事業に勇躍心禁むに堪へぬもの、如く、一句々に明確と、男の聰明
をも服さしめねば置ぬ意氣を籠める。

「妾家庭教師の立場から夫人……モウ只の綾子さんね、あの方が説きたいわ、説てあの方も幸
福にして上げたいわ、ひ、可いませう、それが薫さんの教育に着手する前に必要の事だと思
ひますわ」

(四八)

夫の居室から直に來いとこの事である、口惜しい侮辱に泣いて居た綾子は氣を取り直して急いで
行つて見ると、其室には夫の姿は見えないで喜代子が獨り傲つた姿勢で座る。綾子を見ると。
「さお入りなさい、妾貴女に改めてお目にかゝりたくつて呼んで頂いたのですよ」

蒲團も二らぬ無禮なる態度に、綾子は此上の侮辱を進んで受けたくない、と一應の會釋はして。

「妾主人に……」

と立かける。

「主人と有仰るのは大野さんの事ですか大野さんならモウ貴女にお遇ひぢやありませんまいよ」

「何と有仰るのです」

綾子は最前は客に對する禮とも堪へて、何も云はずに退いた、強いて先方から出るのなら許されぬ舉動と胸を定めて座る」

「綾子さん、貴女其御了簡は大層貴女御自身に不利益ぢやありませんかね」

喜代子はズット膝を進ませる正面に敵を取控がん意氣込。

「失禮でございますが妾貴嬢の仰被る事が解らないのでございますが……」

「ほ、ほまだお解りにならないの、貴女ねえ、能く冷静にお考へになつたらいわ、貴女さうして何時まで頑固に以前の地位を守らうとなさるの、モウ大野さんの御夫人といふ資格は消えて了つて居るといふ事を反省なすつたら可いでせう」

綾子は嚇となつた、五體中の血は逆様に流る、かと、身は慄いて聲は顫ふ。

「妾貴嬢からその様な事を聞く理由は有ません、貴嬢は佐藤さんの嬢さんと仰有つたのですねえ、佐藤さんの嬢さんが手前共の家庭の事を……」

「はあ妾男爵佐藤信明の妹喜代子ですよ、妾貴女に斯な事を申上げる必要も資格も有つて云ふのよ」

「オヤ妙な事を伺ひますことね、今日初めて入つしやつて妾初にお目にかゝる貴嬢から……必要だの資格だのと仰有るのは何の事でございますか、妾頓と合點が參らぬのです」

「ほ、ほ、貴女が御合點なさらない中に貴女の周囲の事状は全然變つてる事にお氣が附きませんかねえ、綾子さん、妾斯な事を申上げたつて決して感情を害して下さらない様にね、妾感情の爲に理性を取失ふ様な人は大嫌ひだから」

と喜代子は呑んでかゝる。

「女性同士の同情と云ひますわね、妾同情すればこそお目にかゝる早々斯な事を申上げるのよ綾子さん、世の中に何が愚かだつて自分を知らない程不覺はありませんわ、妾貴女が何故御自分を見ないのかそれが不思議でならないわ、貴女は大野さんを捉まへて主人だの夫だのと仰有るけれど、大野さんの目からは貴女はモウ他人ですわ」

「ほ、ほ貴嬢こそ他人ぢやありませんか妾達夫婦の間が何ございませうともそれは他人の貴嬢から……」

「まだあんな事を云つてらつしやる、綾子さん、夫婦の間を繋ぐのは愛の力ですわね、貴女愛といふ綱が切れてもまだ夫婦が離れないものと信じて被在るの、夫の愛に離れた貴女が何時までも大野さんを夫と信じて被在るのは大變な間違ひぢやありませんか」

「妾夫は何處までも夫です、離れる愛ではございませぬ」

「ほ、ほ、貴女は大野さんばかりぢやなく御自身をも欺いて被在るのね、よし夫の愛があるにしても貴女はモウ夫を愛する事の出来ない身體ぢやありませんか、妾何も彼も能く存じて居るのですよ」

「何を御存じか知りませんが……妾此上貴嬢からそんな事を聞く理由はありません」

綾子は席を立かける、喜代子は聲を激しうして。

「綾子さん、ナル程貴女の頑固で事理の解らないお方ね、愛情の無い夫に随いて行くなんて古い思想を守つて何時までも醒めない女で被在るのは貴女の御勝手だけれど、随かれる方も随いて行く方もお互ひの不利益だから、それを見兼て妾が御同情するのを……」

「佐藤さん、折角御深切に難有うございませぬが妾貴嬢から御同情を頂く譯にまゐりませぬ、妾は何處までも大野の妻でございませぬ、夫の許可を得ないで斯なお話をなさる貴嬢にお目にかゝる事さへ心苦しうございませぬ、失禮します」

堪りかねて立つ袂を喜代子の白い手が確と捉へる。

「御同情が可けないと仰有るのなら止むを得ないわ、妾權利を主張します、綾子さん、大野さんの御息薫さんを妾に引渡しして貰ひませう」

「エッ」

と綾子は相手の顔を見返した。

(四九)

薫を引渡せと云つて袂を捉へた喜代子は綾子が驚愕の爲に顔色を變へたのを見て左もこそと勝利の心を聳やかせ、鼻の先で冷かに笑つた。

「妾貴女に薫さんの引渡しを要求する權利があるのですよ、貴女は感情の爲に理性を亂して被

在るのだから妾の忠告も好意に解釋なさる事が出来ないのだわ、妾と對話する事も厭だと仰有るのですね、妾止むを得ないから妾の権利を主張するのですよ、綾子さん、貴女これを御覽なさい」

捉へた杖を放すと喜代子は懷中を探つて一枚の紙を取出した、それを綾子の目前へ突つけて。

「お話が厭なら書いた物で交渉しませうね、能くお讀なすつて」

綾子は立つた儘披げられた紙に目を落す太い字は正しく夫の手蹟である。

綾子の顔色は見る々々蒼白になつた。

「それは……」

と云つてベツタリと坐ると、慄く手に其紙を拾ふてモ一度一字づゝ讀み返すのである。

「……薫の家庭教育と、及び妻を離別したる小生が家庭一切の事を擧げて貴嬢に委任いたし候……」

口の中で讀む夫の委任状……文字は霞んで見えずなつた。

「妾改めて御挨拶を致しませう、妾今日から大野さんに招聘された薫さんの家庭教師です」

飽くまで憎々しい態度に出る喜代子に對つて、綾子はスグ何も答へる事が出来なかつた。

「お解りになつたら薫さんと呼んで下さい、それから次に妾は貴女に至急處決して頂きたいのです、それは其委任状にある第二の權限ですからね」

黙つて云ふが儘を聞いて居た綾子は其時沈痛だ聲で。

「妾夫が書いた貴嬢への此委任状を破る事が出来ますよ」

「エ、破るとは？」

「之を無効の反古にする事が出来るのです」

「貴女が？」

と喜代子は稍周章てた色をする。

「何して、すね、何して此委任状が無効なんです」

「妻を離別したとありますが妾離別された覚えはございません、離別されぬ妾が居ります以上當家の家庭へは他人様の御干涉は受けないのでございます」

「まあ」

と態と呆れた聲を強めて。

「貴女まだ離別されない氣？、本統に呆れて了ふわ、大野さんのこれ直筆ツてことをお認めて

せうね、立派に離別したと書いてあるぢやありませんか
『それは読みました、書いた物ばかりぢやありません、大野の口から妾直接に聞いたことも
ございます』

『そら御覽なさい、それに貴女は何故此委任状を反古と仰有るの』
詰寄る喜代子、綾子はモウ平常の静平な調子になつて。

『夫が口に筆に申しましても妾まだ離縁を承諾しません、妾は當家に正當な手續きを履んで參
つた者です立派に結婚の方式を濟せた夫婦です』

喜代子は厭な顔をして口の中で何か呟やいた。

『妾の離縁といふ事が決らない以上は此委任状は無効でございませう』

キツパリと云放たれて、喜代子は追詰めた鼠に噛まれた猫の、九分の勝利を顛倒し忌々しげ
に舌打したが、輕蔑んだ様な憤つた様な、とりどりの意含む厭な笑ひを唇邊に浮べて。

『正當な離縁の手續きが濟んでないから貴女はまだ大野さんの妻と仰有るのねほ、ほ、ほ、手
續や式は夫婦の楔子ぢやありません、愛情の綱が切れた夫婦の同様に何の意味がありますか
ねわ』

『妾切れた愛は繋ぐ覺悟です』
綾子が精神を其儘に云現はした凜然たる詞には、喜代子は大きな強い力に頭上から壓付られた
氣がした、が持前の負けぬ氣はいよく反抗の刃を磨ぐ。

(五〇)

夫の愛を繋いで見せると覺悟の精神を示した綾子の詞を堪へられぬもの、様に喜代子は嘲り笑
つた。

『ほ、ほ、ほ、貴女がそんな頑固な事を云つてらしても、肝腎の大野さんの心は貴女を去つ
て廣い新しい自由な世界に飛んで被在るのよ、それを貴女の……古い陳腐な、形式ばかりの
愛で繋かうとなさるのは滑稽……といふよりもイツン悲惨ですわ、死んだ人の歸るのを待つ
愚かよ』

『妾は愚かな女です、けれども夫に盡す妻の真心は有つて居るのでございます夫の精神の鏡が
假令一時曇りませうとも妾はそれを以前の光りに磨く責任を有つて居るのでございます、そ

それが古いか新しいか、形ばかりの愛かは存じません、妾は何處までも人の妻の行く道を歩くばかりでございます』

『貴女そんな古い思想を有つて被在るから大野さんが新生活に突進うとなさる邪魔になるのよ……』

委任状を握つて今日が日からも此邸宅に坐り込む目算だつたのがそう行ぬ腹立に喜代子は聞くに堪へぬ悪罵を並べた末。

『それぢや妾、薫さんに遇ひませう、家庭教師の義務を行うに御異存は有りますまいね、貴女の問題と何の關係もないのですからね』

『妾それもお断り致します』

綾子の判然とした詞に喜代子は険しい目をして其顔を凝と瞋めた。

『家庭教師を招きまするのは夫の権能でございしますが家庭を掌る妾は其教師の良否に就て争ふ事が出来るのです』

漸次に氣勢を増して却々に侮りがたい相手の強味に喜代子は刺々と心を燃した。

『良否に就て？、妾が當邸の家庭教師に不適任と云ふのですね、妾は貴女から試験は受けませ

んよ、失禮な、妾を侮辱なさるのですね』
と喚り立てた。

『ほ、何方が侮辱されたのでございませうか貴嬢能くお考へを願ひます、妾決して失禮は申上げません、夫には又考へがございませうから、それを聞きました上で當方からお願ひに出るとも』

『大野さんと呼んで下さい』

喜代子は敵を弱いと見てか、つて見事な敗を取つた、廣之と謀し合せ、綾子の居堪らぬ様に仕向けて直にも家出をさせ、薫を傳りする人となつて此家に留まる成算は九分調ふたものと安心して、先刻そつと廣之は外出したのである、或處で吉左右を待合す約束がある、家に居ぬ事を綾子よりも知りながら、云ひ負された憤怒と、屈辱を繕らう其場の紛しに廣之を呼べと苦しい聲を上げたのである。

邸宅中を探したが夫の姿は見えぬ、外出の用品が見ぬから何處へ行つたのであらうと、その由を喜代子に通じると、彼は散々に毒口を残して遂に去つて了つた『此侮辱を屹度覺へていらつしやい』といふ様な詞も綾子の耳に残つた、坐敷の様子を概略聞いた音藏は『男爵の令嬢に

大正三年二月四日印刷
大正三年二月九日發行

定價金五十錢

樋口隆文館 營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版に及び其卸賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君に及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候

△御賣目録御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本願ふとしてなるや御書き添へを願ふ

△樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず新刊發行致べく候

△樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候

△樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大坂八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文には汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

不許複製

【附 奥 男】

著者 羽 様 荷 香
 發行者 樋口 源次郎
 大阪市南區鰻谷仲之町
 二百二十四番屋敷
 印刷者 田中松之助
 大阪市南區、寶寺町
 仲之町三十番地

發賣元

大阪市南區三休橋 鰻谷南入西側

樋口隆文館

(振替口座大ノ七九七)

樋口隆文館 出版講談小説之部

● 玉田玉秀齋講演

- 武田家 眞田 彈正 三彈正
- 同 保科 槍 彈正
- 同 高阪 智惠 彈正
- 元和中 中條 兵庫之助
- 大仇討 中條 武勇 傳
- 中條 兵庫旅 日記
- 奥羽 後 中條
- 豪傑 緒方 丸 弘行
- 豪傑 魔風 軍 藤太
- 緒方 黒山 旗 揚
- 天保 浪 花 大 潮
- 天保 後 大 潮
- 寛永 春 日 熊 之 丞
- 後 日 宮 嶋 大 仇 討

これは有名なる武田家三彈正の傳記です 全三冊物

これは劍法中條流の元祖として有名なる元和中豪傑中條兵庫之助の面白い一代記です 全四冊物

これは越後の黒姫山に旗上をした豪傑兒雷電也の傳記でござる 全三冊物

これは有名なる大鹽平八郎先生の傳記です全二冊

これは豪傑春日熊之丞の面白い一代記です全二冊

● 傑兒 玉由利之助
 これも玉秀齋得意の豪傑物です 全二冊

● 同 後の 由利之助
 これは豪傑が勢揃ひをし野州庚申山に悪狐を退治るといふ面白い御話 全三冊

● 豪傑 松平 康之助
 これは近代の怪勇士として有名なる近藤勇の一代記です 全二冊

● 怪 勇 後の 近藤 勇
 これは軍人物の面白い新講談です 全二冊

● 魂 鮫 嶋 武 雄
 これは有名なる勇士傳にして至極勇壯活潑なものです 全三冊

● 天 明 三 人 男
 これは伏見の俠客文珠九助の傳記です全一冊

● 山 田 屋 辰 五 郎
 これは大久保彦左衛門の諸國漫遊記です全二冊物

● 夕 立 勘 五 郎
 物です 全二冊

● 玉龍亭一山講演

これは演者が得意の專賣物です

○義侠の大井道實 演者は人情新講談にして
○不敵の兒嶋お春 演者が得意の専賣物です
○可憐の小出仙太郎 全三冊物

●秋月玉光講演

○豪傑 師の梅吉 演者獨特の俠客物にして
○同 後の薬師 至極趣味の有る面白いも
○同 其後の薬師 のです
○女 俠龍神お玉
○女 俠後の龍神 全六冊
○俠客 唐獅銀治

●旭堂南陵講演

○豪傑 青地作右衛門 演者は有名なる浪花三劍士の
○同 上總六郎 傳記にして南陵の専賣
○同 大力牛之助 物
○戀の松平辰子 全三冊
○犯罪 関係せる事件です
○同 屑屋鐵五郎 全二冊
○海賊船 東天丸 演者は南陵得意の新講談
○東天丸 五良吉 面白いです
○同 全二冊

●松林伯知講演

○講談 太平記 演者は有名なる太平記を
○同 卷之二 読み易く講談に直したも
○同 卷之三 のです
○同 卷之四 全五冊讀切
○同 卷之五

●玉田玉芳齋講演

○小松後藤荒太郎 演者は有名なる小松三勇
○同 稻葉太郎 士の傳記です
○同 水間大八郎 全三冊にて讀切
○豪傑 杉本備前五郎 演者は豪傑が勢揃ひをし
○同 武田武者之助 て上州箕輪城にて大仇討
○同 武田鬼景 をする勇壯なる御話
○同 神刀忠次郎 全五冊
○豪傑 勢揃箕輪城大仇討

●松月堂煤林講演

○日本本佐分利左内 演者は槍術の三大家とし
○三槍傳大嶋伴六 て名も高き上記三豪傑の
○三槍傳梅田奎之丞 傳記なり

●神田伯海講演

○實説お俊傳兵衛 演者は至極情愛のある面
○お俊傳兵衛後日談 白いものです 全二冊
○怪傑 金忠輔
○同 後の金忠輔 演者は有名なる豪傑金忠
○同 其後の金忠輔 輔の面白い一代記です
○同 其後の金忠輔 輔の面白い一代記です
○同 其後の金忠輔 輔の面白い一代記です
○同 其後の金忠輔 輔の面白い一代記です

●桐野金城講演

○天下 靈問答 演者は有名なる大阪妖怪
○怪談 後日の幽霊 屋敷の由來記です
○天下 三傑 後日の譽
○産湯の森變化退治

●浮世亭夢丸講演

○客時 宗五郎兵衛 演者は有名なる美少年録
○俠客 後の時宗 演者は有名なる美少年録
○其後の美少年録 情合のある面白いもので

●神田伯龍講演

○美少年 録 演者は有名なる美少年録
○後の美少年 録 情合のある面白いもので

東光齋改め

大畑匡山 □諸國珍談集(全) (珍談集です)
 春秋園 □俠妓胡蝶 後編 (新物です)
 同 □俠妓胡蝶 後編 (新物です)
 花冠者 □思はぬ戀 後編 (新物です)
 同 □思はぬ戀 後編 (新物です)
 安岡夢郷 □地獄 後編 (悲劇物です)
 同 □地獄 後編 (悲劇物です)
 同 □薄命 後編 (新物です)
 同 □薄命 後編 (新物です)

鹿嶋櫻巷 □ (三十二錢) 海の豪傑
 同 人 □ (三十二錢) 同 後編
 同 人 □ (三十二錢) 同 後編
 安岡夢郷 人 □ (三十二錢) 飛將軍
 同 人 □ (三十二錢) 同 後編

此目録の外にも續々と新版發行準備中
 でございます……。

(意注御)

右に記せし小説は東西各地の新聞紙上にて好評を博したるものに付其面白いことは御受合の出来るものでいづれも樋口隆文館の發行物です

特別大割引直

卸直目録は販賣若くは貸本營業の方に限り郵券三錢送らるれば進呈す
 卸直
 ▲印は……貳拾貳錢……
 ◎印は……貳拾五錢……
 ○印は……參拾貳錢……
 ×印は……四拾錢……
 但し卸直は營業用として一時に十冊以上注文の方に限る
 送料は一冊六錢(三冊迄八錢) (内地限)

語るも涙である!!!

神戸又新日報記者

如鬼坊君作 歌川國松君畫

初編 鱗與之助
 次編 乳守のお仙
 終編 池沼鯉之助

木版極彩色艷麗
 美人畫挿入
 各一冊
 實價 四十五錢
 三冊同時に御注文の方は内地に限り送料不要

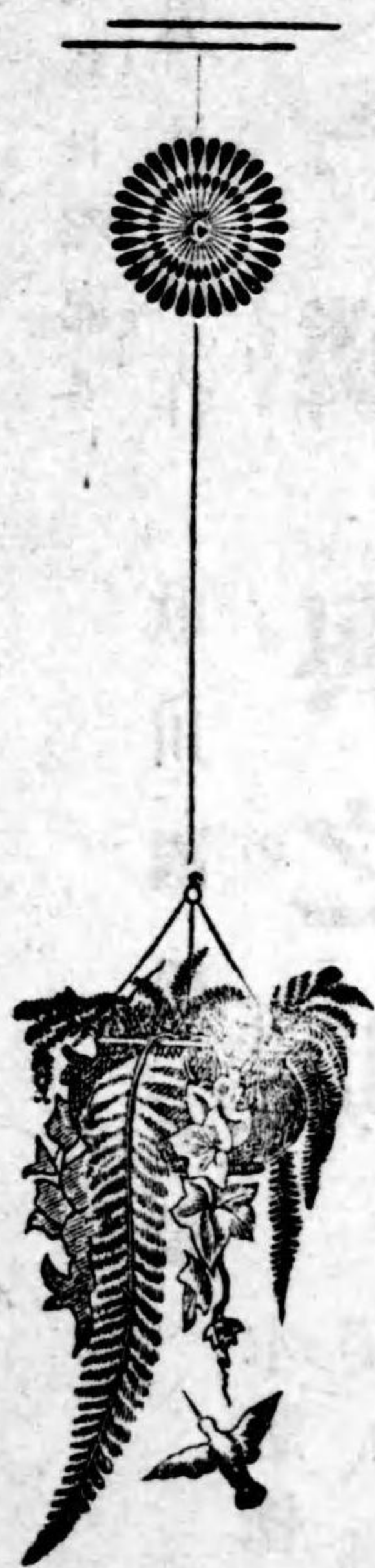
本篇は千里見透しといふ、摩訶幻妙、神奇不可思議の怪術を行ひし、鱗與之助の面白き一代記にして、事の發端は、古來神話的の怪傳説ある、印旛沼なる壺ヶ淵の怪物をば獲殺したるよりはじまり、續いて起る有趣味の事件には、あはれ無残な花ならば、春まだ淺き未開の紅ともいふべき、容姿愛すべき佳麗の一處女が、山中無住の廢寺に於て、兇猛野獸の如き多數の強賊のために脅され、落花狼籍危機間一髪といふ、至極キワドイ艷場もある、編中に活動する人物には、勇士あり、孝子あり、義人あり、俠客あり、苦節の美人あり、亂倫の妖婦あり、起伏千變波瀾萬態、各有趣味の大活動をする、頗る面白き多人數向の小説にして、其文章は一種平易なる言文一致体なれば、講談物のみを讀んで居られる人にもわかる至極通俗な面白き讀物なり。

中村兵衛君著 長谷川小信君畫

家庭妻の罪

極彩色木版密畫挿入
實價 四十五錢
送料 六錢

光明の照せる物體の半面には、其處に必ず暗黒の陰影がある、温良貞淑の賢夫人として、模範的家庭の女主人公として、令名高かりし清見夫人の美佐子も、流石に女性は心弱きものぞ、惡魔の呪咀か邪神の誘惑か、あはれ或動機に於て或重大なる、悔いても及ばぬ罪惡を犯した、嗟、傷ましや、此善良無垢なりし良家の妻を驅つて、永久に救ひ得ざる罪惡の深淵に、何者か敢て赴かしめたるものぞ、之妻の罪か、將良人の罪か。



渡邊默禪君作 長谷川小信君畫

磯の松風

密畫挿入頗美本
全二册既刊 各一册 四十五錢宛
送料 二册三付八錢

本書は新聞でも大好評、又劇に演じても非常の大當を取つた頗る面白い悲劇的小説であつて主人公は、華族の落胤で高柳欽一といふ帝國大學の學生、それへ命もと打ち込んだのが、下宿屋小町と評判の美人で年は十八お峯と云ふ尤物、その又お峯に年にも耻ぢず、眼も鼻も無く屬魂と惚たのが、高倉といふ高利貸の好色老爺、また其他に、藝妓、惡書生、俠客、惡車夫、といふやうな、邪正善惡種々雑多の人物が、卍字鞆繪と入り亂れて、個々有趣味の大活動をするといふ、至極面白い小説でござる。

(他に同名の異本あり御買求めの際は樋口隆文館發行の物と御指定ありたし)



渡邊默禪君作 井川洗厓君畫

每日電報 風流菩薩

改正實價

各一册五十錢宛

全貳册既刊

本書は東京毎日電報紙上に連載して、讀者數十萬の心血を衝動せしめし頗面白き小説にして作者は御馴染の默禪先生にして、挿畫は井川洗厓君が、優艶鮮麗の彩筆になれり、實にやこれ文装双美無比の好讀物なり、久く賣切絶版中の處今回増刷出來せり、又々賣切れとならぬ中に、早々買ひたまへと御勧めをす。

(本書御注文の節は大阪樋口隆文館發行の物と御指定ありたし)



渡邊默禪君作 歌川國松君畫

櫻井一策

全貳册

實價各一册

四十五錢宛

木版數十度摺

美人畫挿入

本書は、憂國慨世の壯士櫻井一策と、其の情婦なる柳橋の名妓小判のお春との間に纏綿せる情話と、彼等兩人の多難多恨にして波瀾曲折多かりし其半世の行徑を描けるものにして、作者は御馴染の默禪先生、畫も御馴染の國松畫伯が濃艶鮮麗の彩筆になれる、木版數十度摺の美人畫を添へたれば、讀で面白く見ても心地好き、花も實もある無比の好讀物なり。



中村兵衛君著 長谷川小信君書

事實小説 狸心中

極彩色木版密書挿入 全一冊讀切 實價一冊四十錢

男は學生、女は花魁、明治二十四年神戸市福原遊廓に起りし事實譚なり、關係の人物今に多く現存せり、以て架空の小説にあらざるを知られよ。

羽様荷香君作 前野春亭君書

悲劇小説 武士系

極彩色木版密書挿入 全一冊讀切 實價一冊四十錢

羽様荷香君は『命』の著者である、本書は命よりもより以上に多數讀者を感動せしめつゝある小説、以て内容の如何を察せられよ。

和田天華君作 前野春亭君書

悲哀小説 静子

木版極彩色密書挿入 全三冊發行濟 各一冊實價四十五錢宛 送料内地に限り不要

悲むべき運命のもとに生れ承りし主人公の静子は、世に最多く同情に値する薄倅可憐なる女性の一である！、冷酷なる社會と無情なる境遇は、性情玉の如く、操行雪の如く、純潔無垢なり。彼女を壓迫して、女教師より藝妓に、藝妓より女優に、敢て自其身を、墮落せしめた、可驚の變化よ！可嘆の墮落よ！、境遇變化の動機は何？噫！悲痛悽慘、讀むも涙である！



渡邊默禪君著 井川洗厓君畫

雷鳴六郎

雷鳴六郎後篇

全貳册共既刊

實價 各一册五十錢

郵送料各一册六錢

本書が如何に面白いかと云ふことは、讀んだ御方に聞いて貰へば分る、早く後篇を出して呉よ、まだ出ぬか、まだ出ぬかと、やかましく御催促になつて居りましたる愛讀者御待兼の後篇を、今回新版賣り出しましてございますから、どうか賣切れと成りませぬ内に、早御買求めあらんことを願ひます……………。

276
412

終

